

2026 年 8 月 9 日（聖霊降臨後第 11 主日、A 年特定 14）

メッセージ

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」

（マタイによる福音書 14: 22-33）

司祭ヨセフ太田信三

教会は、しばしば舟にたとえられてきました。日本聖公会宣教 150 周年記念礼拝のテーマ「漕ぎ出せ、沖へ」にも表されているように、舟は今も教会を象徴するものの一つです。

今日の福音で「湖」と訳されている言葉は、「海」とも訳されます。海は、神の創造の力に敵対する原初の水、混沌を連想させます。今日の福音においても、湖は神の力に敵対するあらゆる力を象徴していると読むことができます。逆風や波は、教会を混乱に陥れ、その前進を阻む力を思わせます。

主イエスの昇天後、弟子たちは教会を担っていきます。しかし、その歩みは決して平坦ではありません。嵐の中で一晩中漕いでも進むことができないような、厳しい現実が待ち受けています。そのような現実の中で、教会は「幽霊だ」と叫んだ弟子たちのように、近づいてくださる主イエスをさえ見誤ってしまうことがあります。ペトロのように主を信頼したいと願いながらも、強い風に目を奪われると、信頼と恐れの間で心が揺れ、沈みかけてしまいます。それは、信仰共同体のきわめて現実的な姿です。

しかし、今日の福音は、主イエスがどのようなときにも教会を見捨てず、救ってくださることを伝えています。主イエスは湖の上を歩き、弟子たちのもとへ来てくださいます。

「幽霊だ」と恐れる弟子たちに、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と声をかけてくださいます。そして、ペトロが「主よ、助けてください」と叫ぶと、イエスはすぐに手を伸ばして彼を捕まえてくださるのです。

私たちは、「来なさい」という主イエスの招きに応えます。それでも恐ろしくなったときには、「主よ、助けてください」と叫ぶことができます。その叫びに応じて、主イエスはすぐに手を伸ばしてくださいます。そして、主イエスと共に再び舟に乗り込むと、風は静まります。教会という舟が航海を続けることができるのは、主イエスが共にいてくださるからです。主イエスを見失うとき、その舟の歩みは危ういものとなります。

混沌や神に敵対する力が猛威を振るう場を象徴する海に対して、聖書には、神と出会い、祈る場としての「山」が描かれています。独り山に登り、父なる神との交わりに身を置かれた主イエスが、荒れる湖の上を歩き、弟子たちのもとへ来てくださいます。そして、その主イエスが共におられるからこそ、舟は再び進んでいくことができます。

私たち教会の歩みが、また、一人ひとりのキリスト者としての日々の歩みが、いつも主イエスと共にありますように。混沌と混乱の中にあっても、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と語りかけてくださる主イエスに立ち返る共同体でありたいと願います。